The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バールムクンド・グプタ ： インドの諸言語の文字について
Author(s)	古賀, 勝郎
Citation	印度民俗研究. 2007, 10, p. 4-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50070
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バールムクンド・グプタ　：
インドの諸言語の文字について

古賀　勝郎　訳・注

以下はバールムクンド・グプタ（1865-1907）が雑誌及び新聞に発表した論説 2 篇の翻訳であるが，必要に応じて訳者の注を加えた。はじめにグプタの略歴を紹介する。

バールムクンド・グプタ (बालमुकुन्द गुप्त) は 1865 年現今のハリヤーナー州ローフタク (रोहतक) 近くのグリヤーニー (गुड़ियानी) の金融業を営んだ商家に生まれた。カースト的に言えばアグラワール・バニヤー (अग्रवाल) で父祖の血統はゴーヤル (गोयल) である。今日のような教育制度の確立していなかった時代にあって受けることのできたた教育は家業の継承という目的もあり制約もあり当時は当然のこととしてウルドゥー語とペルシア語を地元のマクタブで学んだ。師はムンシー・ワジールムハンマド・ハーン मुंशी मुहम्मद ख़ाँ、ムンシー・バルカト・アリー मुंशी बरकत अली であった。学業とは別に詩作については後にミルザー・シタム・ザリーフ मिर्ज़ा सितम ज़रीफ़ に師事した。グプタは 14 歳の 1879 年に一週間の間に父親と祖父が相次いで亡くなるという不幸に見舞われたため学校での学業は中断した。長男であったがために親類の支援も受けるかたわら自らも家業に従事することになった。家業の見通しの立つようになった 1886 年には一時デリーに出て Delhi High School に在籍した後プライヴェートと呼ばれた検定試験制度によりミドル級 (Middle) 終了の資格を得た。その間にも独学と私淑した師につく形でウルドゥー語、ペルシア語、英語を学んだ。ブラジュバーシャー語による詩などの韻文の他には学習の対象となるほどの散文作品のなかった時代でありヒンディー語の特別の勉強はしていないことになる。

グプタの伝記を著しているバナーラシーダース・チャトゥルヴェディー बनारसीदास चतुर्वेदी はグプタのジャーナリストとしての活躍の時期をウルドゥー語での時期 (1886-1889) とヒンディー語での時期 (1889-1907) とに分けている。1886 年にはヴリンダーワンから発行されていたウルドゥー語の月刊誌『マトゥラー・アクバール』(मथुरा अख़बार) に詩を発表するなどしていたが、同年、チュナール चुनार から刊行されていたディーンダヤール・シャルマー दीनदयालु शर्मा編集・発行のウルドゥー語月刊誌『アクバーレー・チュナール』(अख़बारे चुनार) の編集に携わった。'88 年から'89 年にかけてはラーホールから刊行されていたウル

ドゥー語誌『コーヘヌール』(कोहे नूर)[1] の編集者となった後、'89 年から'91 年にかけてアワドのカーラーカーンカル(कालाकांकर)から発行されていたヒンディー語による最初の日刊紙ヒンドスターン紙(हिंदोस्थान) の編集部に勤めた。これはグプタにとっては大きな転機となったが、そもそものきっかけは、'89 年に上述のパンディット・ディーンダヤール・シャルマーの知遇を得たことであった。シャルマーはヒンドゥー教の伝統的・護教的立場に立っていた宗教運動家且つ政治運動家であったが、彼を介してグプタはヒンドスターン紙の当時の編集長で後にヒンディー語の普及・振興運動の中心人物の一人であり伝統的立場に立つヒンドゥー教再興運動、バナーラス大学の創立などにかかわった教育者、国民的政治家として活躍することになるヒンドスターン紙の主筆マダンモーハン・マーラヴィーヤ (1861-1941) の知遇を得た。また、この時期には同僚でもあったが、19 世紀後半の近代ヒンディー文学の黎明期の代表的なジャーナリスト、文学者の一人であるプラタープ・ナーラーヤン・ミシュラप्रतापनारयण मिश्र (1856-95) とも親交を結ぶことが出来たしヒンディー語の詩作の上で師事することも出来た。しかし、グプタは政府批判の筆が経営者の気に入らないこともあり'91 年 3 月には馘首されたようだ。それからしばらくの間故郷に戻ったが、上記のディーンダヤール・シャルマーの依頼で'92 年 7 月にはウルドゥー語の月刊誌『バーラト・パルタープ』(भारत परताप) を編集し創刊号をジャッジャル(झज्जर)から発行している。その後'93 年 1 月から'98 年末にかけてカルカッタの週刊誌『ヒンディー・バングバーシー』(हिंदी बंगवासी)[2] の編集部に副編集長として携わり'99 年 1 月から病没する 1907 年 9 月までの間カルカッタの日刊紙『バーラトミトラ』(भारतमित्र)[3] の編集長となった。ウルドゥー語での活躍の時期は短いように思えるが、自ら語ったところによると'84 年から'89 年にかけての詩作はすべてウルドゥー語及びペルシア語によるものであったし詠んだ詩はウルドゥー語によるもののほうがヒンディーのものより多いとしている。その作品はラクノウから発行されていたウルドゥー語週刊誌『アワドパンチ』(अवध पंच)などに掲載されていた。ここに紹介する文章も一編はウルドゥー語月刊誌『ザマーナー』(ज़माना)[4] に掲載されたものである。したがって彼は終生ウルドゥー語の筆は手放さな

かったと考えるべきであろう。

ヒンディー語の学習はミドルと呼ばれた学年の試験を受ける課程で行ったもののそれ以上の本格的な勉強は独力で'86 年頃から始めたものと思われる。そして彼の通信記録やラージャー・ラクシュマンシン राजा लक्ष्मण सिंह(1823 - 93) やシュリーダル・パータクश्रीधर पाठक(1859-1928) など当時の著名なヒンディー語文学者などとの交流の書簡などから'88 年にはウルドゥー語からヒンディー語での執筆活動に移行しつつあったように推察されている。グプタ自身はヒンドゥー教徒の家庭に育ったので当然のことながらヒンドゥー教徒としての教養を身につけていた。すなわち、ヴィシュヌ派の讃歌の日常の読誦やトゥルシーダースのラーマーヤン、あるいは、スールダースのスールサーガルなどの定期的な読誦などを介してサンスクリット語に繋がるヒンディー語の高級語彙の中核を含む言葉に親しんでいたことと思われる。成人後の彼をヒンディー語の世界へ導く契機を作ったのはヴリンダーヴァンのヴィシュヌ派のスワーミー・ナーラーヤン及びメーラトを主たる活躍の場としてデーヴァナーガリー文字（ナーガリー文字）(5) の普及運動という形でヒンディー語の振興のため熱心に活動し自らもヒンドゥー女性を主題にした小説などの作品を著したガウリーダット गौरीदत्त（1836-1905）であったのだろうと追悼記念集の編者ジャーバルマッル・シャルマー झाबरमल्ल शर्माは推察している。グプタがウルドゥー語の世界で執筆や編集の仕事をするかたわらヒンディー語に関心を深めヒンディー語での表現力を磨いていたことは彼が上述の『アクバーレー・チュナール』अख़बारे चुनार の編集者を辞して間もなくカーラーカーンカル (कालाकांकर) から発行されていた『ヒンドスターン新聞』に接触を求めたことからも知られる。彼はすでに'88 年 4 月にはヒンディー語散文の確立に指導的な役割を果たしたラージャー・ラクシュマンシン राजा लक्ष्मण सिंह(1823-93) に "मेघदूत" や "रघुवंश"、"शकुन्तला" などの翻訳について訊ねるために直接手紙を送っているし 6 月には『コーヘヌール』の編集者としてラーホールからシュリーダル・パータクश्रीधर पाठक と接触しイギリスの詩人、小説家 Goldsmith (1728-74) の 'Deserted Village' のヒンディー語訳 'ऊजड़ ग्राम' と同じく 'Hermit' のヒンディー語訳 'एकान्तवासी योगी' の紹介を『コーヘヌール』で行いウルドゥー語でも同様な趣向の詩が作られることを期待するとの評を行っている。

グプタはウルドゥー語及びヒンディー語のジャーナリストとして活躍したが、ヒンディー語文学の評論以外にもウルドゥー語文学やベンガル語文学に関する評論も行っており、またカリーボーリー・ヒンディー及びブラジュバーシャーでの詩作も行った。ベンガル語からヒンディー語への翻訳（ベンガル語小説 मडेल भगिनी, '91）やサンスクリット戯曲のヒンディー語訳（हर्षの रत्नावली）なども遺している。彼の伝記や作品の一部が刊行されている。'बालमुकुन्द गुप्त स्मारक ग्रन्थ' 及び 'बालमुकुन्द गुप्त निबन्धावली', प्रथम भाग （いずれも झाबरमल्ल् शर्मा及び बनारसीदास चतुर्वेदी 編、गुप्त स्मारक ग्रन्थ प्रकाशन समिति, कलकत्ता, 2007 वि॰）

（注）

(1) 『コーヘヌール』誌　ラーホールから発行されていた。最初は週刊誌であったが、後に週 2 回、週 3 回を経て'85 年 11 月から日刊紙となる。

(2) 『ヒンディー　バングバーシー』誌　当時カルカッタのベンガル語月刊誌『バングバーシー』を発行していたバングバーシー社 (बंगवासी प्रेस) から発行されていた。

(3) 『バーラトミトラ』誌　पंडित छोटूलाल मिश्रにより'78 年 5 月 17 日に創刊された。発行は Bharatmitra Press, Calcutta より。最初は半月刊誌、第 10 号からは週刊誌、'97 年から日刊紙となる。ヒンドゥスターニー ・バーイーと呼ばれたビハールから西方のいわゆるヒンドスターン平原地方出身の人々やラージャスターン地方出身のマールワーリー商人などを主な対象としたが、最初はほとんど読者のいない状況で始められた。有給の編集長は 2 代目の पंडित हरमुकुन्द चतुर्वेदी (1884-85) からでグプタ (1899-2007) は 12 代目の編集長であった。

(4) 『ザマーナー』　カーンプルからダヤーナーラーイン・ニガム दयानाराइन निगम が編集・発行したウルドゥー語月刊誌。これについては、当時の代表的なウルドゥー語誌『マクザン』と並ぶほどの内容であるが、後者には政治的な内容のものがないのに対してこれにはそれがあること、それに執筆者にヒンドゥーのほうが多いことが特徴であり、ムスリムの読者にも評判がいいと興味深いコメントを記している。'उर्दू अख़बार',भारतमित्र, 1905

(5) デーヴァナーガリー文字 (देवनागरी लिपि)　ナーガリー文字 नागरी लिपि

とも呼ばれる。古代インドのブラーフミー文字(ब्राह्मी लिपि) の北方系からグプタ文字 (गुप्त लिपि) などを経て 8 世紀頃にその古形が出来たとされる。ヒンディー語、マラーティー語など現代インドの主要な言語に用いられる最も重要な文字であると同時にサンスクリット語などの古典語のほかネパール語の表記にも用いられている。

（1） 共通文字の必要性について

小誌（『バーラトミトラ』）は前号及び前々号においてサールダーチャラン・ミトラ判事が最近カルカッタ大学の大学会館で行われた講演を全文訳出して掲載した。読者諸賢には熟読頂いたに相違ない。未だお読み頂いていない方々には一度慎重にお目を通して頂くようお願いする。ミトラ判事は見事な立論と長年に亘る経験により今やインドには全国に共通する文字を採用する時の到来したこととその資格を有する文字がインド全土に通用することの出来るデーヴァナーガリー文字（以下ナーガリー文字）に他ならないことを見事に証明された。判事閣下はインドばかりでなく、ビルマ、支那、日本及びスリーランカーなどにまでナーガリー文字の普及することを望んでおられる。

この文字については多数の学者たちの意見は一致していない。多くの人はナーガリー文字を大して古いものだとは認めていない。ナーガリー文字以前に種々の文字が行われていたのだということである。多くのベンガル人には自分たちのベンガル文字 (1) がナーガリー文字よりも古いものだと強く主張する。ミトラ判事はそのような議論は一切取り上げずにインド中に今日用いられているすべての文字のうちナーガリー文字が最も易しく美しくそして最も普及しており、更には最も普及する可能性のある文字であることを証明しようとしておられる。そして判事は見事にその目的を達成しておられる。そればかりかナーガリー文字がインド中で一番すぐれていることを証明し更にまた世界中で並ぶもののない正確な文字であることも証明された。

ミトラ判事はインドに印刷機が普及すると同時にボンベイ、カーシー、カルカッタなどでサンスクリット語の立派な典籍がナーガリー文字で印刷されたことを示された。このことからこの文字がインド中で最良のものと判断されたことは明らかである。しからばこれが更に広まり印刷と筆記の両方に広まって然るべきではないか。もしも学者たちがそれぞれの地域の文字の身贔屓をするのをしばしやめてナーガリー文字を考えてみるならば、自ずと自分たちの地域の文字の使用を控えてナーガリー文字の普及に進むべきだと思わざるを得ないであろう。一部の州ではナーガリー文字が優勢である。アーグ

ラー・アワド連合州 (2) ではもちろんこの文字が行われているし同州ではサンスクリット語とヒンディー語の書物の印刷にこれが使用されている。パンジャーブではシク教徒の出現後にグルムキー文字 (गुरुमुखी) [3] が用いられるようになったが、それの使用はシク教関係の印刷物に限られている。サンスクリット語の書物に関してはパンジャーブでもやはりナーガリー文字が優勢である。カシミールでは数百年前からナーガリー文字が通用してきている。パンジャーブでもグルムキー文字は極めて少数の人しか筆記に用いていない。グルムキー文字はナーガリー文字からつくり出されたものであるからよく似ているが、ナーガリー文字以上に書きやすくもない。喜ばしいことにはシク教経典もラーホールなどではナーガリー文字で印刷され始めている。

マハーラーシュトラ地方では筆記用の文字は確かにムリヤー文字 (4) であるが、書物に用いられる文字はサンスクリット語のものもマラーティー語のものもいずれもナーガリー文字でしかなくなっている。グジャラート地方の人はグジャラーティー文字 (5) を用いている。それをグジャラーティー語の活版印刷に用いているが、同地でもサンスクリット語の書物の印刷にはナーガリー文字が用いられるしグジャラーティー語の書物の中でも文章の途中にサンスクリット語のシュローカやサンスクリット語起源の名称が出てくるとやはりナーガリー文字が使用される。グジャラートの人たちはグジャラーティー文字と同じぐらいナーガリー文字に馴染んでいる。グジャラーティー文字 (6) もナーガリー文字にかなり似通っている。したがってグジャラートの人たちは大変容易にナーガリー文字を習得することが出来るしその習得に際して困難は生じ得ない。サンスクリット語のかかわる範囲でグジャラートの人たちはナーガリー文字をすでに採り入れてしまっているのであるから母語のグジャラーティー語の筆記にもナーガリー文字を採り入れるならば問題は解決するわけである。ナーガリー文字によるグジャラーティー語の雑誌が一、二刊行されたことがあった。これと全く同じような状況がビハール地方のカイティー文字 (6) に関して存在する。ビハールの人たちはみなナーガリー文字を知っているが筆記の際にはカイティー文字のほうを多く用いる。このため印刷用にもカイティー文字の活字が鋳造された。それはともかくビハールの人たち

がカイティー文字を捨てナーガリー文字を採り入れるのには全く時間は要しない。

さて、そこで仮に面倒な問題が残るとすればベンガル文字を巡ってのこととなる。ベンガル人には自分たちのベンガル文字についていささか執着がある。ベンガル文字はナーガリー文字の一形態である。母音記号などはほぼナーガリー文字と同一である。ナーガリー文字もベンガル文字もその字形は同じサンスクリット語の様式で形成されている。そうであるならばベンガル人にとっては国のために自分たちの文字をナーガリー文字に変更することは何ら難しいことではない。しかしながら、ベンガル人は直ちにそれだけの大様さを示すことが出来ない。というのは、ベンガル人はベンガル語の書物以外にサンスクリット語の書物までもベンガル文字で印刷するに至っているからである。それでも今なおサンスクリット語のすべての典籍がベンガル文字で印刷されているわけではない。ヴェーダなどの文献は現在もなおナーガリー文字で刊行されている。今は亡きイーシュワルチャンドラ・ヴィディヤーサーガル (7) はその著作であるサンスクリット文典 (व्याकरण कौमुदी) を 4 巻に分けて著しておられる。第 3 巻まではベンガル文字で印刷されているが第 4 巻のスートラの部分にはナーガリー文字がその注釈部分にはベンガル文字が使用されている。ラージャー・ラーダーカーントデーブ卿の著名な辞典「シャブダ・カルパドゥルマ」(शब्दकल्पद्रुम) はナーガリー文字のみで印刷されている。パンディット・ジーヴァーナンダ・ヴィディヤーサーガルはカルカッタから多数のサンスクリット語の書籍をナーガリー文字で出版しておられる。こうしたことをすべて考えあわせるとベンガル語地域でもナーガリー文字が必要とされることが歴然としている。ミトラ判事が更に歩を進めてインド全土にナーガリー文字を広めるべきだと説かれることはベンガル人もまたナーガリー文字を最も重要なものと認識していることを明確に証明するものである。

少し以前にベンガル語の雑誌『プラバーシー』(प्रवासी) の編集長であるラーマーナンド・チャットーパディヤーイー氏 (M.A.) が『チャトゥルバーシー』(चतुर्भाषी) という名の雑誌を発刊されたことがあったが、これにはヒンディー

語、ベンガル語、マラーティー語、それにグジャラーティー語の 4 言語による記事が掲載されておりすべてがナーガリー文字で印刷されていた。残念なことにこの試みは諸般の事情で止んでしまった。小子は同氏が再度この念願を実らせる努力をされることを願う。小子はただただベンガル人学者たちが単にナーガリー文字に好意的であるばかりでなくナーガリー文字の普及運動の先頭にも立っていると言えることをここに示したかったのである。なぜならベンガル人学者たちこそがナーガリー文字が全インドの共通の文字となるべきことを最初に提案されたからである。

‘एक लिपि की जरूरत’『バーラトミトラ』 1905 年

（注）

(1) ベンガル文字 बंगला लिपि. 北方系ブラーフミー文字から派生した文字の一つであるが、古ナーガリー文字の東部形に発するという説とアッサム文字やミティラー文字 मैथिली लिपि と並んでクティラ文字 कुटिल लिपि から出たとする説がある。

(2) アーグラー・アワド連合州 The United Provinces of Agra and Oudh. 以前は The North-Western Provinces and Oudh であったのが、1902 年に改まった名称。

(3) グルムキー文字 गुरुमुखी लिपि. パンジャービー文字 पंजाबी लिपि とも呼ばれる。シャーラダー文字 शारदा लिपि から派生したランダー文字 लंडा लिपि の改良形。以前は主にシク教徒の間で用いられていた。ローマ字では Gurmukhi とも Gurumukhi とも記される。

(4) ムリヤー文字 मुड़िया लिपि. 原文にはムリヤー文字とあるが、これはマハーラーシュトラやグジャラート地方ではモーディー、もしくは、モーリーと呼ばれてきたマラーティー語の筆記に用いられてきた文字を指しているものと思われる。（→ हिंदी विश्वकोश）ナーガリー文字の古形から派生しマハーラーシュトラ地方で 16 世紀頃より用いられてきたとされる。マハーラーシュ

トラからグジャラートや一部ラージャスターンにも及ぶ地域において主に商人たちの間に広まっていた。

(5) グジャラーティー文字 गुजराती लिपि. グプタ文字やクティラ文字を経て発展したとされる古ナーガリー文字の西部分派から出た文字とされる。この文字はナーガリー文字によく似ているがシローレーカーと呼ばれる上部の横線がないのが特徴である。

(6) カイティー文字 कैथी लिपि. 古デーヴァナーガリー文字の東部系文字に発するもので、書記や筆耕を主要な生業としてきたカーヤスト・カーストの間に主に用いられていたことから「カーヤストの」を意味するカイティーという名がある。主に使用されてきた地域はビハール地方であるが、更に 3 種の地域形があると言われる。これはムリヤー文字 (मुड़िया लिपि) ともガシート文字 (घसीट लिपि) (早書き文字とかくずし字の意) とも呼ばれる。

(7) イーシュワルチャンドラ・ヴィディヤーサーガル ईश्वरचन्द्र विद्यासागर (1820-91) サンスクリット学者、ヒンドゥー法典学者。寡婦再婚推進や女子教育の推進運動の先駆者として知られる。

（2）インドに共通の文字を

この数年インドの高等教育を受けた人々の間に全インドに共通の文字を持つべきだとの考えが広まってきている。カルカッタの高等裁判所の元判事サー・グルダース・バナルジー氏はこのことについて英文で小冊子を著している。同氏はインドに行われているすべての文字に言及し、また、字形について詳しく説明を加えた上でナーガリー文字こそが全インドに容易に広まり得る完全にして適切な文字であると結論づけこれこそが全インドに共通の文字となる資格を有するものであると主張している。この冊子が刊行されてからすでに数年を経ているが、これについては後に再度言及する。

２年前に現在カルカッタ高等裁判所の著名な判事であるサールダーチャラン・ミトラ氏（カルカッタ大学文学修士・法学士）が、同大の学士会において講演されたことがあった。同氏はその中でナーガリー文字が最良の文字でありこれを全インドに共通の文字として普及すべきことを大変見事に証明された。その会合にはグルダース氏も同席しておられた。グルダース氏はそれに敬意を表された。この論文は後にイラーハーバードの有名な英字誌ヒンドスターン・レビューに発表されたしその全文がカルカッタから刊行されているバーラトミトラ誌に掲載された。その他特にベンガル人への説明のためミトラ判事はそれをベンガル語で著し有名なベンガル語の新聞に発表された。また、同判事はバーラトミトラ誌に特別寄稿をされた。その論文の翻訳、あるいは、内容はいずれ本誌の読者諸賢の目に触れることになろう。ミトラ判事のこの論文が発表された後、カルカッタでは一つの協会が設立された。その名を共通文字普及協会 एकलिपि विस्तारपरिषद् と言う。カルカッタ市のバラー・バーザールのシュリーヴィシュッダーナンド・サラスヴァティー学校の元校長パーンデーヤ・ウマーパティダット・シャルマー先生（B.A.）がその幹事になり、サティーシュチャンドラ・ヴィディヤーブーシャン氏（M.A.）が顧問になられた。この協会から『デーヴァナーガル』（देवनागर）という月刊誌が発行

され始めた。この雑誌にはヒンディー語、ベンガル語、マラーティー語、グジャラーティー語、ウルドゥー語、ウリヤー語、タミル語など様々な言語の文章が掲載されているが、表記の文字としてはすべてナーガリー文字が使用されている。その発行された創刊号にはインドの 11 の言語の文章が載っている。このことからナーガリー文字がどのようにして各地方、各州の言語を担い得る力を持っているかが判明しよう。

かなり以前にマラーター地方の人たちがその土地の言葉の表記にナーガリー文字を受け入れた。現在ではマラーティー語のすべての新聞や雑誌、それに書籍はナーガリー文字で刊行されている。ヒンディー語とマラーティー語のいずれもナーガリー文字で表記される。グジャラート地方の人たちは自分たち独自のグジャラート語の文字を持っている。これはナーガリー文字にとても似た文字である。これの歴史はせいぜい 100 年前に遡るものである。この文字には母音表示の記号がナーガリー文字の半分しかないのでサンスクリット語を正確に写すことが出来ない (1)。仕方なくグジャラートの人たちはサンスクリットを写すのにはナーガリー文字を使用しグジャラーティー語の筆記にはグジャラーティー文字を使用している。近頃はグジャラートの人たちもその文字に別れを告げてナーガリー文字を採り入れようと努力している。ヒンドゥー教徒の刊行しているグジャラーティー語の新聞や雑誌ではその見出しはナーガリーで記されており本文はグジャラーティー文字で記されている。すなわち、読者たちをナーガリー文字に親しませようとしているのである。今やグジャラーティー語の多数の書物がナーガリー文字で出版されるようになってきている。同地の人たちが用いるサンスクリット語の書物はナーガリー文字で刊行されておりそのグジャラーティー語訳はグジャラーティー文字で記されている。ベンガル人たちは今なお自分たちの文字に固執している。ベンガル文字はナーガリー文字にそっくりなのでベンガル人は容易にベンガル文字を捨ててナーガリー文字を採り入れることが出来るのだがベンガル人は今なおベンガル文字への愛着を捨てることが出来ないでいる。ベンガル人はベンガル語もサンスクリット語も両方ともベンガル文字で表記するのだがサンスクリット語の書物の多くはナーガリー文字で刊行している。とまれベン

ガル人の執着も間もなく終わりを告げるであろう。

ベンガル人の間にもサー・グルダースやミトラ判事のようなナーガリー文字の支持者が出現してきておりベンガル語の書物がナーガリー文字で刊行され始めている。ベンガル人がヒンディー語やナーガリー文字を学び始めている。ベンガル人の間にはかねてからやがてナーガリー文字が全インド共通の文字となりヒンディー語がインド全体の共通の言語になると考える人たちが現れている。この考えは現今その歌詞が全インドにこだましている故バンキムチャンドラ・チャタルジー氏 (2) 自身のお考えでもある。2 年前にバンキム・バーブーのその長文の文章の主要部分がヒンディー語に訳されてバーラトミトラ誌に掲載されている。(3)

ウダイプルのヴィクトリヤ・ホールの館長であるパンディット・ガウリーシャンカル・オージャー氏 (4) が数年前に『古代文字』と題するすぐれた書物を上梓しておられる。古代インドのありとあらゆる文字がこの書物にすべて蒐集されている。オージャー氏はラージプターナーの大変著名な研究者であり今から 2500 年前に遡る古代の多種多様な文字を解読しておられる。現在その再刊を予定しておられるが次版は先の版よりはるかに大部なものとなるであろう。と申すのはこの間に更に多くの書物や碑文を解読されたからである。同氏の書物を読めば一番完全な文字がナーガリー文字であることが判明しよう。インドの各地のヒンドゥー教徒がナーガリー文字を採り入れつつあるのはそういうわけなのだ。従ってベンガル人たちも間もなくそのベンガル文字への執着を捨て去るであろうと期待されるわけである。

マドラース管区には二つの言語が行われている。一つはタミル語（原文ターミル語 तामिल）でありもう一つはテルグー語である。テルグー語はサンスクリット語との繋がりが密だがタミル語とサンスクリット語とはとても疎遠な関係にある。タミル語のある立派な月刊誌で見たのであるが、すべてタミル文字で通して記されているのである。サンスクリット語から借用しなければならなかった部分だけにはナーガリー文字が使用されている。テルグー語を学ぶ人は必ずナーガリー文字も学習するものである。マドラース管区には更に二つの言語が行われているが、その分布はテルグー語やタミル語に比べる

と限られている。マドラースからはサンスクリット語による週刊誌が刊行されていることも注目すべきことである。これにはナーガリー文字が用いられている。また、ヒンディー語による雑誌が一つ同地から発行されている。発行者はマドラースの人であり編集者も兼ねている。マドラースで刊行されているサンスクリット語の書籍はすべてナーガリー文字によっている。マドラース文字 (5) はサンスクリット語の記録には不適であって役に立たないからである。このようにインドの知識人たちはヨーロッパの様々な国や様々な言語が共通の文字を持っているようにインドにもナーガリー文字を共通の文字にしようと努力している。

1905 年 12 月 29 日にインド国民会議の大会終了後、バナーラスで同地のナーガリープラチャーリニー・サバー（ナーガリー文字普及協会）(6) の主催によりインド全土に共通の文字を広めるための特別会議が催された。バローダー藩王国宰相のラメーシュチャンドラ・ダット氏 (C.I.E.) がその会議の議長を務められた。この会合では著名人たちが意見を発表された。ダット氏の講演の概容は次の通りである。

この会議が望んでいるのはインド全土に共通の文字を普及させることであります。かなり以前から一部の有識者が考察を深めてきてはいます。かつてベンガルで全インドにローマ字をインド諸言語の共通文字とする運動が行われたことがあったことを記憶していますが、この運動は確かに無益なことでありました。そのため運動は広がりもしませんでした。だが、私どものこの会議はナーガリー文字を全インドに共通の文字として広めようとしているのであります。各位におかれましては、始めに新しい文字を受け入れることを困難に感じられるでありましょう。ベンガル人はナーガリー文字を甚だ難しい文字だと考えています。学習できないものだと考えております。グジャラートやバローダー、その他の地域にもナーガリー文字は大変ゆっくりと広まりつつあります。しかし、自分自身の経験から申しますとひとたびナーガリー文字を学ぶ決意をするならばそれがどれほど容易なことかが判明しましょう。私はインド高等文官試験の受験にイギリスに渡った際にはナーガリー文字の一つの文字すら知りませんでした。いささかサンスクリット語を知ってはい

たのですが、それもベンガル文字を介してでありました。しかし、彼地ではベンガル文字は相手にもされませんでした。私は他の科目と一緒にサンスクリット語も履修しましたので余儀なくナーガリー文字も学ばなくてはならなかったのですが、3ヶ月の間にベンガル文字を書くのと変わらない速度でナーガリー文字が書けるようになりました。バローダーの藩王閣下がこのところ大変熱心に努力なさっていることは藩王領でのナーガリー文字の普及であります。藩王領内ではアージュニャー・パトリカー (आज्ञापत्रिका) という官報が刊行されておりその一部分はグジャラーティー文字で一部はナーガリー文字で印刷されているのですが、言葉はいずれのものもグジャラーティー語であります。バローダーの役人でナーガリー文字をグジャラーティー語の文字と同じ速度で書けないような人はほとんどいません。したがって、一つの言語を知っていてさらに何か新しい文字を書く習慣を身につけるのは大して難しいことではないのであります。半世紀前にはドイツではすべての文字は古いドイツ文字で出版されていたのですがヨーロッパの他の国の人と交流するという考えが生じてきたものですから今から四半世紀前からはローマ字を用いた書籍が出版されるようになってきました。そのために何か不都合が生じたわけではありません。私たちもドイツ人を見習わなくてはなりません。このような考えはすべてのインド人を一つに団結させたい、インド人を相互に緊密に結びつけたい、という広い視野に立った考えの一部を成すものであることに注目していただきたいのであります。このことを成功に導く第一の方策は各言語の標準的で一般に親しまれている書物をナーガリー文字で刊行することであります。もちろん当初はこのような書物はナーガリー文字を知っている人たちの間でしか売れないでしょうが、直ぐに他の人たちの間にも広まることでありましょう。

以下はティラク氏 (7) の発言である。

皆様、本会の目標については議長が説明をなさいました。1 時間半の間に 10 人の発表者が予定されているのでごく簡潔に申しますが、まず最初にこれは単に北インドについてのみ共通の文字を普及させるためのものではなく、全インドに共通の文字を普及させるという目的を持った高邁な民族的思考の

発露であるということであります。何故かと申せば民族精神を養うには一つの共通の言語が不可欠であります。言語を一つにすることにより己の考えを他人に向かって表明出来るのであります。大聖マヌの言にもある如くあらゆるものの知識は言葉を媒介することにより可能となるものであります。すなわち、民族を一つの紐帯に結びつけるというのであればまず最初に共通の言葉を創り出そうではありませんか。これを凌駕するような強力な力を持つものは他にはありません。このことこそが本会議の基本方針となるものであります。われわれは単に北インドばかりでなく徐々にデカン地方からマドラースへと全インドに一つの共通の文字を普及させることを目標としています。大いに努力すればあらゆる困難も容易なものとなり得ましょう。最初の困難は歴史的な理由によるものなのです。古くはアーリヤ人と非アーリヤ人の間の、下って現今はヒンドゥー教徒とイスラム教徒の間の対立と嫌悪とが言語上の統一を破壊してしまっているのであります。北インドのヒンドゥー教徒がサンスクリット語に発するアーリア系の諸言語を多く話すのに対して南インドの言語はドラヴィダ語に発するものであります。両者の違いは単に語彙ばかりでなくそれを書き表す文字にも及んでおります。それにウルドゥー語とヒンディー語との対立があります。これはこの地方では甚だ大きな意味を持つようになってきております。マハーラーシュトラ地方にはムーリー文字とかガシート文字と呼ばれる文字 (8) が広く用いられているのですが、これはナーガリー文字とは別個のものと考えられています。しかしながら今日ではわれわれのマラーティー語の新聞や書物はナーガリー文字で刊行されております。

われわれはインド全体に共通の文字と共通の言葉を作り上げることを目標としているのでありますが、まずはヒンドゥー教徒を対象にして始めなくてはならないでありましょう。はじめにナーガリー文字とタミル文字、すなわち、ドラヴィダ系文字との間に統一を生み出さなければならない。この両者の間には単に文字の相違があるばかりでなくタミル語にはアーリヤ系の言語には存在しない発音が幾つか存在しております。われわれは階段を一段ずつ上りたいと願っているのであります。最初に議長が仰せになられたようにわれわれはサンスクリット語に発する言語から取り組みます。すなわち、ヒン

ディー語、ベンガル語、グジャラーティー語、マラーティー語、それにパンジャーブ語がそれなのでありますが、これらはすべてサンスクリット語に発するものでさらにその筆記に用いられる文字もすべてインドの古い文字が変化を重ねるうちに今日の姿形になったものであります。今日ではそれらの言語の文法にも発音にも筆記法にも差異が生じてきております。それにもかかわらずそれらの文字はご覧の通りよく似通っております。

本会議を主催したナーガリープラチャーリニー・サバーはすべてのアーリヤ系言語に共通して用いられる文字を作りだそうと考えているのであります。そうすることでその共通文字で書かれた書物をアーリヤ系言語の多くの愛好者は読むことが出来るようになりましょう。この考えの重要性を私どもは認めるものでありますが、特定の文字が最良だということになると困難が生じることになります。例えば、ベンガル人は自分たちの文字がグジャラートの人々やマハーラーシュトラの人々が用いている文字よりも歴史のあるものだからどの文字よりも最良の文字だと言うことが出来ましょう。また、一部の人はナーガリー文字をインドの共通文字にしたく思い歴史的に最古の文字だと思っております。

私の考えでは歴史的な観点から証明する方法ではこの問題は解決されません。と申しますのは、アショーカ王の時代から今日に至るまでの間の石碑を見てみるならば少なくとも 10 種類の文字が見出されのであります。その内のカローシュティー文字 (9) やブラーフミー文字 (10) が最古のものと考えられているのでありますが、今日に至るまでの間に大きな変化が生じてきております。わが国に今日行われてきている文字はすべて古代の文字が変化して今日に至っているものでありますから歴史的な調査や研究ではこの問題は解決されないのであります。この困難を解決するためにかつてローマ字 (11) を採用する案が提示されたことがありました。そうすればアジアとヨーロッパに共通の文字が行われる利点があると考えられたわけでありました。しかし、これは全く無意味なものでありました。ローマ字にわが国の発音を表記する力があるはずがありません。ローマ字の欠点はイギリスの文法家たちも認めているところであります。同じ文字が様々な発音を担っており同じ発音を表すのに 3、4 個の文字に点などの色々な符号を付けない限り私どもの発音を表現

することは困難であります。したがって全インドに共通の文字を考えるのであれば、ナーガリー文字が一番なのであります。ヨーロッパのサンスクリット学者たちが、ヨーロッパで行われているどの文字よりもナーガリー文字のほうが完全なものであると認めております。そうであれば、ナーガリー文字をさておいて他の文字を探すことは自殺行為以外の何物でもありません。

さらに申すならば、文字と発音に関してはインドは大変な努力を重ねてきているのであります。パーニニのサンスクリット文法がその証左であります。世界中にこれと並ぶ文字と発音を表すすぐれた方法は他にはありません。わが方では一文字が一つの発音を、一つの発音に一つの文字が用意されているのです。

インド総督カーゾン閣下 (12) はインド全土に統一の時間（標準時間）を制定されたのでありますが、私どもは同じようにしてインド全土に統一の文字を望んでいるのであります。閣下がインド統一時間の代わりに統一の文字を制定されていたならば私どもは感謝していたでありましょう。ベンガル人にはベンガル文字は生来身近なものであります。私にはそのことについては異存はありません。同様にグジャラートの一部の人々も自分たちの文字は簡単なものだと申します。というのはその文字の上にナーガリー文字のような横線を書かないからであります。同様に一部のマラーター人もマラーターの文字 (13) でサンスクリット語が表記できるのだと申します。とまれ私どもは簡単で上手に書くことが出来る、そして見た目に美しい文字を選ばなくてはなりません。同時に早く書くためにはそれを容易にくずし書きが出来るようにしなくてはなりません。インドのすべてのアーリア系言語の音を表記できるものであって最も広域に行われているものでなくてはなりません。

アムバーラール・シャンカルラール・デーシャーイー氏 (M.A., LL.B.) は次のように語られた。

以前グジャラートの小学校教科書にはナーガリー文字とグジャラーティー文字の両方が用いられていたのでグジャラートの学校の生徒たちはナーガリー文字も知っておりました。しかし、現在では人々はグジャラーティー文字だけを望んでおります。これは不幸な結果を招くことになりましょう。議長は良

書がナーガリー文字で出版されるように望むと申されました。確かに大変立派なご意見であります。私の考えではグジャラーティー語で書かれている理科の本はすべてナーガリー文字で印刷されるべきであり他のすべての商業通信文にはこれからナーガリー文字が使用されるのが望ましくあります。アーマダーバードの人たちはこれをすでに開始しております。

バールチャンドラクリシュナ卿（सर भालचंद्रकृष्ण）はこの意見を支持して次のように語られた。

わが地方で刊行されているサンスクリットの文献はすべてナーガリー文字で印刷されております。ナーガリー文字が英領インドのすべての州で受け入れられることが大切でありますが、そうするのは何ら難しいことではありません。全インドの言語がヒンディー語となり文字がナーガリー文字となることが肝要なのであります。

同氏はこのように述べてボンベイ管区でマラーティー語の文字を変えることについて生じたある出来事の話をされた。教育局の局長が文字と綴字を変更しようとしたので反対したのだが一向に聞き入れられなかった。そのため問題点を示しそのようなことをすれば紛争が生じることになるかも知れないと当局に訴え出たところようやく申し出が聞き入れられたということであった。

カルカッタのキーロード・プラサード・ヴィディヤーヴィノード教授 (M.A.)、マドラス州セーラムのヴィジャヤ・ラーガヴァ・アーチャーリヤ氏 (B.A.) などの学者たちが各々の意見を開陳された。

小子は、ヒンディー語かウルドゥー語かで争っている人たち [14] にはヒンディー語を主張する人たちが何を望んでいるのか何を目標としているのかを理解して欲しいと願う者である。その人たちはウルドゥー語側の人たちと何らかの争いを望んでいるわけではないしウルドゥー語に打撃を与えようと願っているわけでもない。ただ、ナーガリー文字を全インドに広めるのが宿願なのだ。そうすることでサンスクリット語から出た様々な言語が互いに接近するであろう。すべてのヒンドゥー教徒とインドのすべての言語を近づけようと努力しているのである。ヒンドゥー教徒はヒンディー語とウルドゥー語を

同じ言葉だと理解している。また、イスラム教徒たちも以前はウルドゥー語をヒンディー語と同じだと考えていた。特にデリーの人たちはそうなのだ。しかし、ラクノウの人たちはアラビア語の語彙を無闇に詰め込んでこれを別の言葉にしてしまったのである。(15)

‘हिन्दुस्तान में एक रस्मुलख़त’『ザマーナー』1907 年 4・5 月号 (16)

（注）

1　グジャラーティー文字にはシローレーカー（ナーガリー文字上部にある横線）のないことについて述べているものと思われるが、正確な表現ではない。

2　バンキムチャンドラ・チャタルジー (1838-94) बंकिमचन्द्र चटर्जी（चट्टोपध्याय）近代ベンガル語散文の確立に力を尽くした小説家。小説以外にも多くの随筆や評論を遺した思想家でもある。ここに触れられているのは 1884 年に発表された彼の小説『アノンドマト』（ヒンディー読みではアーナンド・マト　आनंद मठ）の中に歌われている「バンデーマータラム」बन्दे मातरम्のことで、インドの独立達成までの間、独立運動の象徴として愛唱された。

(3)　“भारतमित्र” 1904 年　の論説「インドの言葉」(‘भारत की भाषा’) の中にヒンディー語によるインドの団結を説くバンキムチャンドラの文章‘भारते एकता’「インドの団結」からベンガル文字をナーガリー文字に改めたままの引用がある。“बंगदर्शन”, 1284 बं॰ 5

(4)　गौरीशंकर हीराचंद ओझा (1863-1947)　インドの古代史、考古学、古文字学の権威。1898 年に「インドの古文字」(भारतीय प्राचीन लिपिमाला) についての著作を発表した。

(5)　これは南方系ブラーフミー文字から派生したタミル文字のことでサンスクリット語の書写には不十分。同じく南方系ブラーフミー文字からサンスクリット文献の書写のために考案されたグランタ文字とは別。

(6)　カーシー・ナーガリー文字普及協会 काशी नागरीप्रचारिणी सभा は、裁判所や役所などにおけるナーガリー文字の公的使用を認めさせる運動の推進を目的として श्यामसुंदरदास, रामनारायण などの尽力で 1893 年にカーシーに設立された団体。1900 年 4 月 18 日付の北西州及びアワド政府の通達によってその目的を達成した後もヒンディー語の普及、ヒンディー語文献の保存や研究、出版などの活動を今日に至るまで続けている。1836 年までは東インド会社の公用語は英語と並んでペルシア語であったが、1837 年以降はペルシア語に代わって土着語（現地語）とされた。ベンガル州のビハール地域や中央州 मध्य प्रांत においてはナーガリー文字によるヒンディー語の使用が 1873 年以降徐々に進められ'80 年代に入ると本格化して行ったのに対し北西州及びアワド The North-West Provinces and Oudh においてはヒンドゥスターニー語 (Hindustani)、すなわち、ペルシア文字（ウルドゥー文字）によるウルドゥー語のままの状況が続いていた。このため北西州及びアワドにおいてはデーヴァナーガリー（ナーガリー）文字の公的使用の推進運動は 19 世紀末にかけて盛んになって行ったが、同時にウルドゥー語側からの反対運動も激しくなって行った。最大の問題点は使用する文字が異なることにより高級語彙が（サンスクリット語に偏した）インド系か（アラビア語やペルシア語に偏した）イスラム系かのいずれかに傾斜を強めて行きその隔たりがあまりにも大きくなりヒンディー語かウルドゥー語かということになってしまうことであった。

(7)　バールガンガーダル・ティラク बालगंगाधर तिलक　マハーラーシュトラのプーナ（プネー）出身の教育者、ジャーナリスト、政治家として活躍。コングレス（インド国民会議派）の急進的な指導者として著名であった。

(8)　原文にはムーリー मूड़ी とあるが、マラーティー語で मोड、もしくは、मोडी と呼ばれる主に商人カーストが用いてきた文字。

(9)　カローシュティー文字 (खरोष्ठी लिपि)　ブラーフミー文字と並ぶ古代インド文字の一。北インド、北西インド、中央アジアにかけて西暦前後数百年間用いられた。起源については国内説と国外説とがある。

(10)　ブラーフミー文字 (ब्राह्मी लिपि)　古代インドの文字。西暦前数百年からその存在が知られる。後に北方系と南方系とに分かれ一部地域を除きイン

ドの主要言語の様々な文字がこれから派生した。

(11) ローマ字　インドの言語を表記する文字としてローマ字を用いることやそのローマ字を選択する考えはその後も存在した。北西州でのナーガリー文字の公的使用要求運動が高揚してきた 1896 年には政府が同州でペルシア文字（ウルドゥー文字）の代わりにローマ字を普及させようとしているとの噂が広まった。ペルシア文字（ウルドゥー文字）側の危機感ももちろん強かったが、ナーガリー文字側の危機感も一層強くなりそのためナーガリー文字普及協会は 'The Nagari Character' という冊子を作製してナーガリー文字の優秀性を主張した。政府の審議会もローマ字案を支持したものの結局はローマ字の採用は見送られたという経緯があった。しかし、それによってインドの言語にローマ字を使用しようとする動きが絶えたわけでは決してなかった。20 世紀の '60 年代に Suniti Kumar Chatterji はインドの諸言語を表記するために改良されたとする文字、すなわち、改良インド式ローマ字 (Indo-Roman Script) やカルカッタの Roman Letters Society（रोमक लिपि समिति）の存在について言及しており個人的には「ゆくゆくはインド人自身のためにローマ字がナーガリー文字をはじめとするインド系文字にとって代わるであろうことを楽観視している」旨を記している。(S.K. Chatterji, Languages and Literatures of Modern India, Culcutta, 1963)

(12) インド総督カーゾン George Nathaniel Curzon (1859-1925)　イギリスの政治家で 1899-1905 の間インド総督。

(13) マラーターの文字 मरहठे हुरूफ़　ここではマハーラーシュトラ（マラーター）のモーリー文字のことを指すものと思われる。

(14) 1900 年 4 月 18 日の州政府の決定は (Resolution of the Government of the North-Western Provinces & Oudh, No.585/III-343c-68) の形で 4 月 21 日付の公報に掲載されたが、予期されたようにイスラム教徒側ないしはウルドゥー語側からの反発が生じた。Urdu Defence Central Commitee などの組織が反対キャンペーンを行っている。これに対してグプタはこの決定を喜ぶかたわらイスラム教徒側の報道がすべてこの決定を宗教にかかわる問題として捉えていることを憂慮してヒンドゥー側が浮かれたり大騒ぎしたりせず落ち着いた態度を採るよう注意を促すかたわら次のようにも述べている。「ナーガリー文字側

の人たちはイスラム教徒にイスラム教徒はなにも奪い取られたのではないし彼らの権利が剥奪されてヒンドゥー教徒に与えられたのでもない。ただデーヴァナーガリー文字に裁判所にまで届けてよいとの許可が与えられただけのことだと理解してもらうようにしようではないか。イスラム教徒の報道はすべてこの問題を宗教的なものに色付けしてウルドゥー語とヒンディー語との戦いだと述べている。もしもこの問題を巡って両教徒の和合に不調和が生じるならば不幸なことである。ナーガリー文字普及協会側の人たちにはこの騒ぎが鎮まるまでは慎重に振る舞ってほしいものだ。つまらぬことで喜び浮かれることはない。イスラム教徒には自分たちがウルドゥー語と呼んでいる言葉がヒンディー語と別個の言葉ではないことを是非知ってもらいたい。ウルドゥー語の初期の詩人たちはこの言葉をヒンダヴィー語(हिंदवी) と呼んでいたのである。…」‘भारतमित्र’(1900 年 5 月 21 日)　ただし、ヒンドゥー教徒に自重を求めながらもグプタの筆鋒は鋭い。ラクノウのイスラム教徒たちによるナーガリー文字への反対陳情書の中に、ナーガリー文字が適切な文字であれば商人カーストが様々な文字を発明したり工夫したりする必要はなかったではないかという表現があったのに対し彼は次のように反駁している。「バニヤーとかマハージャンという商人たちの使用する文字のことをもってナーガリー文字が不適切な文字だとするのは正しくない。商人の帳簿のことを例にして論じるのであれば、デリーのほとんどのイスラム教徒の店主はマハージャニー文字を用いて帳簿をつけているしデリー出身のイスラム教徒が大変幅を利かせているカルカッタのコールートーラーでもやはり商人たちの帳簿にはムリヤー文字とかマハージャニー文字が用いられているのだ。それにそのイスラム教徒たちは普通の商人のように無学ではない。いやそれどころかペルシア語やウルドゥー語をしっかり学んで知識を持っているのだ。ラクノウのイスラム教徒たちはその商人たちに何故ペルシア文字で帳簿をつけないのだと訊ねるがいい。ペルシア文字が役立たずなのか。ナーガリー文字はなにも難しい文字ではない。ペルシア文字のように 4,5 年もかかって学ぶものではない。半月もあれば十分だ。イスラム教徒の諸君はナーガリー文字を学んでペルシア文字と比べた後でものを言ったらどうなのだ。」　‘भारतमित्र’（1900 年 5 月 21 日）

(15) この脈絡では北西州教育審議会の報告書（Education Commission Report by the North-Western Provinces and Oudh Provincial Committee, 1884）に近代ヒンディー文学の開拓者であったバーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ भारतेन्दु हरिश्चन्द्र の考えが興味深い質疑応答の形で掲載されているので次に紹介する。

“ … Question 11. Is the Vernacular recognised and taught in the schools of your province the dialect of the people; and if not, are the schools on that account less useful and popular ? ...

Answer 11. It is rather difficult to answer the question, what is our vernacular language ? In India it is a saying - nay, an established fact - that language varies every ‘yojana’ (eight miles). In the North-Western Provinces alone there are several dialects. the Vernacular of this province, though it can be divided, owing to its various intricate and manifold forms, into a hundred subheads, has four main features - (1) Purvi, as is spoken in Benares and its bordering districts; (2) Kannauji, the dialect spoken at Cawnpore and the adjoining districts; (3) Brajbhasha, as spoken in Agra and its neighbourhood; (4) Kaiyan or Khariboli, as spoken in Saharanpur, Meerut, and the neighbouring districts. … Thus, it will be seen that out of four features of the vernacular of this province, as noted above, only two, viz., Brajbhasha and Khariboli attract attention. Brajbhasha is used in Hindi poetical composition, and Khariboli under two different disguises is spoken with abundant use of Persian words and written in Persian character, is styled “Urdu”, and when free from such foreign mixture and written in Nagari character, is termed Hindi. Thus, we come to the conclusion that there is no real difference between Urdu and Hindi. … ”राम गोपाल, स्वतंत्रतापूर्व हिंदी के संघर्ष का इतिहास, हिंदी साहित्य सम्मेलन, प्रयाग, 1886 शक॰

(16) 原文はウルドゥー文字によるウルドゥー語で発表されているが、使用したテキストはウルドゥー語の原文をナーガリー文字に翻字したものである。ヒンディー語読者には難解と思われる一部の語彙については編者によっ

てヒンディー語の対語が脚注に記されている。

＊　上に訳出した（1）及び（2）の原文はいずれも前記の बालमुकुन्द गुप्त निबंधावली, प्रथम भाग に収載されている。

＊＊　人名や地名などの固有名詞についてはなるべく原文の表記に従ったが必ずしも一貫してはいないことを記しておく。